

郷土の歴史を見つめ、郷土を愛する心を育てる学習づくり

— 6年地域の歴史「語り人」プロジェクトの実践 —

兵庫県たつの市立小宅小学校 教諭 石堂 裕

e-mail oyake_es@ tatsuno.ed.jp

キーワード：文化財保護活動、人とのかかわり、言語活動の充実、学びと評価の一体化

1. はじめに

人の出入りが激しく住宅地であるたつの市小宅地区は、現存する播磨国風土記に1320年前の様子が一部記載されたり、歴史的な史跡が残っていたりするものの、地区にまつわる歴史的な事柄を語り継ぐ人や書物が少ないという現状である。そこで歴史に詳しいお年寄りグループ「おやけのまち」を知る会や市文化財課の協力のもと、校区にある身近な文化遺産について、調査したことをもとに国語科の学習と関連させながら、歴史冊子を発行したり、文化財のガイドをしたりして、その良さを伝える活動を通して、文化財保護の意識と地域を愛する心を育てようとした。

2. 歴史遺産を伝える計画づくり

(1) 学習意欲を高める専門家の話

歴史学習についての子どもたちの関心を高めておくことが、学習活動への目的意識を高めることにつながる。そこで、市教委文化財の専門家をゲストティーチャーに迎え、「小宅」の由来が平城京遷都より古いことをきっかけに、校区の歴史に関する興味深い話と子どもたちへのミッションを話していただいた。下記の子どものコメントからも、専門家の話が学習意欲を高めることにつながっていることがわかる。

【子どもたちのふり返りシートから】

K先生は、写真をもとに、小宅の由来や小宅地区にある史跡について紹介してくださいました。すべてを紹介するのではなく、調査のヒントとなることを教えてくださいました。K先生は、歴史調査の心構えは、まず興味を持ったら自分でとことん調べることが大切だということでした。だからこそ私たちへのミッションは、「小宅の史跡を調査し、地域の方に知らせること」なのです。

(2) プロの技にふれる

子どもたちの調査意欲を高めるため、神戸新聞社NIE推進室から編集者を招き、取材と文面の書き方講習をしていただいた。国語の学習材以上に、取材では「下調べの重要性」、「個人情報への配慮」、「写真の撮り方」等、また書き方では、「5W1H」についてなど具体的な話に、子どもたちは聞き入っていた。

この話を受け、子どもたちは次の流れで調査活動を進めることになった。

写真1 新聞記者の話



聞き取り調査の流れ（新聞記者講習会をもとに）

①下調べ

調査グループごとに分かれて、事前に地域の高齢者が書かれた冊子等を参考にして質問を考えておく。（下調べによって、質問が具体的になる。）

②取材

知りたいを中心インタビューする。地域の高齢者は、写真をもとに説明してくださいました。



③整理

聞き取り調査をもとに分かった情報を整理し、さらにもっと知りたいことを考える。

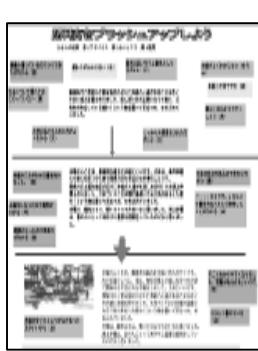
写真2 聞き取り調査

この聞き取り調査の後、お年寄りとともに現地調査を行った。子どもたちは講習会で学んだ通りのメモ書きと写真撮影を行った。特に写真にはこだわる子が多く、狙いがはっきりとしていた。

3. 学び合いで変わる言語力

(1) 取材にもとづいた記事づくり

取材を終えたグループから冊子編集作業に取り組んだ。冊子づくりでは、「5W1H」を意識しつつ、的確にまとめるすることを目標とした。この作業で役立ったソフトウェアが「コラボノート」である。コラボノートには写真3のように付箋機能があり、グループ間の学び合いが効果的にできる。またこのソフトにはワード形



式に変換し印刷できる機能があり、これを用いて、レイアウトを工夫し、現地調査に立ち会ってくださった高齢者のアドバイスを受けた。デジタル化すると校正しやすいことに気づいた子どもたちは、よりよいものをとアドバイスを求め、結果的に6回の校正を経て、冊子を完成させたのである。

写真3 コラボノート

以下は、あるグループの10月と学び合いによりブラッシュアップされた2月の原稿である。

【10月の元原稿】昔の浦上井堰

鎌倉時代に揖保川の富永地区の辺りに井組の人達が水田に水を引くために浦上井堰を作りました。田んぼに水が必要になった時に、三角の形をしている底わくという物を置いて石をつめ、せきどめていました。

【2月原稿】昔の浦上井堰

井堰のことを井(ゆ)、農業用水組合を井組(ゆぐみ)と呼んだそうです。左下の写真のように、昔は、毎年田植えの前に石をつめた俵(たわら)で揖保川をせき止める作業をしました。大井(おおゆ)といいます。揖保川の上富永地区の辺りに井組の人達が水田に水を引くため浦上井堰を作りました。大井づくりには井堰の基礎となる三角の形をした底わくという物を置いて石をつめ、せき止めました。

(2) 伝える力を伸ばすために

恒例行事である「オータムフェスタ in たつの」は毎年、市内外から1万人を超える多数の方が訪れる。それに市の指定文化財堀家住宅の特別公開展を位置づけ、調査活動から得た知識の定着と伝える力の向上、そして地域に貢献することを目的にボランティアガイドに取り組んだ。158人全員がガイドができるようになるために、何が必要か話し合った結果、「ガイドの手引き」が必要だということになった。プロジェクトリーダーを中心に資料やインターネットで観光ガイドの心得等を調査し、手引き(案)を作成した後、全員で検討した結果、小宅小オリジナル「ガイドの手引き」が完成した。この手引きをもとに、ペア練習、グループ練習、そして模擬テストと様々ななかたちで練習した。



写真4 堀家住宅特別公開展

アンケートによる評価を整理するために、回収した約2000枚のシートを分担して整理し、グラフ化した。

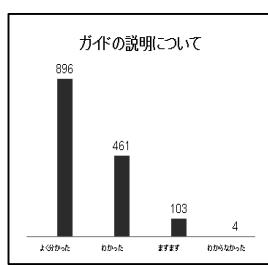


図1 ガイドの評価

4. より多くの方に知らせるために

【地域の方(40代女性)のアンケートコメント】

結婚してこの地に住んで15年になりますが、余りに知らない事の多さにびっくりしました。子供達がこのような冊子を作って下さり、勉強になると共に小宅って素晴らしい場所だなあと感じました。子供達が自分の力で学習し冊子にする活動はとても素晴らしいですね。この活動を継続して欲しいと思います。

より多くの人に小宅校区の歴史を知っていただくために、アナログ冊子(写真5)とインターネット版のデジタル記録集(写真6)を作った。この作業と関連して、新聞記者から学んだ個人情報の扱い方や著作権、肖像権については、情報モラル学習と関連して指導した。(ソフト: 東京書籍: 情報教育とコンピュータ)

(1) アナログ冊子で紹介

上述したように、ワードで編集したデータを約30ページの冊子にし、主要な施設、地域の方に配布した。この冊子は好評で、回収したアンケートすべてが取り組みを評価した内容であった。

(2) デジタル作品をインターネット版冊子で紹介

デジタル記録集の作成については、学習活動を振り返る上で大変効果的である。活動ごとに保存しておいた写真やメモをもとに、小グループに分け、編集活動をした。(ソフトウェアはホームページビルダーを活用)あえて冊子には載せていない学習活動の様子を紹介することで、冊子を見た人からの「冊子作りの活動



写真5 アナログ冊子



写真6 インターネット版

5. 終わりに

子どもたちの主体的な文化財保護活動やPR活動によって、地元自治会をはじめ、地域の方の意識が変わり、堀家住宅に関するところ、地域に保存会ができた。また子どもたちの意識も明らかに変わった。上のグラフは、158人に「小宅地区を自慢できるかどうか」を聞いた結果であるが、どの子も本プロジェクトをきっかけに全員が自慢できると答えていることから、郷土への愛着心が芽生えたことが分かる。

更に嬉しい情報として「堀家住宅」が県の重要文化財に指定されたのである。1年という異例のスピード昇格に、市の関係者や11代目当主さんからお礼の言葉をいただいた子どもたちは、笑顔がこみ上げ、みんな大喜びだった。

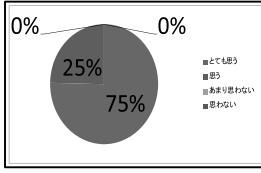


図2 子どもの意識

最後に、これからもこの郷土を大切にする心を失わないで欲しいと願うとともに、次の6年生もこの活動を引き継ぎ、地域の宝を守り続けたいと思う。